

シカゴ社会学の鍵概念（その3）

——トーマスとトーマスとシブタニ

後 藤 将 之

1 ^{ハンブル・マン} 慎ましい人

タモツ・シブタニ (Tamotsu Shibutani, 1920–2004) は、1920 (大正9) 年10月15日、明治期日本の起業者澁谷庄三郎の子孫澁谷楯之助 (英語名ナオノスケ・シブタニ Naonosuke Shibutani) と相原タカ (タカ・アイハラ Taka Aihara) の一人息子として、カリフォルニア州ストックトンに生まれた¹⁾。ナオノスケとタカはアメリカ移民の日系一世である。小論では、現地での一般的な呼称に従って、しばしばトム (・シブタニ) と表記する。筆者は1985年以来トムと交渉があった。

父ナオノスケは実業家一族の「変わり者」で、同志社で新島襄の思想に触れ、コロンビア大ではマルクス思想にも影響された (公式かは未詳)。社会改革のため政治家を志すが言葉の限界から果たせず、日系移民への保険販売業をしつつ日系人コミュニティに貢献した。トムは父を「挫折したマルクス主義知識人」だったと表現する。母タカは、階級を意識する保守的な日本の富裕な地主の娘で、息子を日本式の紳士に厳しく育てようとしたという。

高校時代に日系人への人種差別を意識するようになったトムは、父の示唆で社会学書を読み、パークとバージェスの『社会学の科学への入門』に印象を受ける。同時期にフロイトを発見する。ストックトン・ジュニア・カレッジに在籍し (1939～40年)、18歳でデューイの『思考の方法』を読んでプラグマティズムに影響される。1939年にスタンベックの『怒りの葡萄』が出版され、カリフォルニアのオクラホマ人が同書に影響されるのを見て、作家の道をも夢想した。1940年UCバークレーに進学、新任のドロシー・トーマスに指導を受ける。バークレー

では同時期に W・I・トーマスの授業も受けている²⁾。

シブタニへの影響源は、シカゴの大学院で指導を受けた社会学者ルイス・ワース、エヴァレット・ヒューズ、ハーバート・ブルーマー等とされるが、その学的営為の出発点が、パークレーでの両トーマスからの直接の薫陶だったことは重要だろう。彼がシカゴの院へ進学したのも、ドロシーおよび W・I と、シカゴでの先輩の日系二世の社会学者ショーター・フランク・ミヤモト (S. Frank Miyamoto) (収容所でも一緒だった) の勧めによる。

トム・シブタニの学歴には 2 回の中断がある。1942 年にパークレーの学士課程を修了してから 1943 年にシカゴの社会学大学院に進学する間の 1 年間と、そこでの修士課程在籍期間 (1943 ~ 44 年) と博士課程在籍期間 (1947 ~ 48 年) の間の 3 年間である。この前 1 年間は、彼が北カリフォルニアのトゥールレイク日系人収容所に収容されつつ、ドロシー・トーマスの調査助手として参与観察に従事した期間である (調査への協力自体は在学中から進学後 1944 年まで続く)。後 3 年間は 8 か月ずつ 3 つの期間に分かれ、アメリカ陸軍の兵士として従軍した。最初の 8 か月は歩兵として従軍、次の 8 か月は陸軍情報部で日本語の教育を受け、最後の 8 か月は横浜戦犯裁判の通訳のため来日した。彼の以後の学的営為を通して、これらの期間の体験が影響を残している。トムはこの時期に来日して以後、二度と日本の土を踏もうとしなかった。アメリカ国内では親族や日本人と普通に交流している。筆者を含む周囲が何度となく再来日を勧めても、彼は言葉を濁すだけだった。

タモツ・シブタニを語るとき、多くの関係者が決まって口にした表現が、「慎ましい人 humble man」だった。主張の激しいアメリカ社会にあって、トム・シブタニほど自己や業績について主張しない学者は珍しがられていた。現地において humble man は、敬意は払われても、必ずしも肯定的な評価ではない。それはまた、彼の仕事を検討する際の問題にもなりうる性向である。

一例として、彼は、シカゴの大学院を修了後、1948 ~ 51 年の 3 年間、そこで社会学の講師をした。1951 年春学期の彼のセミナー「群集行動と行動感染」は、歴史に残る研究成果を生んでいる。院生だったカート・ラングが、すでに結婚していたやはり院生のグラディス・E・ラングを含む多くのゼミ生と実施した、「マッカーサー元帥のシカゴ凱旋パ

レード」の研究、とりわけそこでの「テレビ中継による独自の現実再構成」の発見である (Lang and Lang, 1953)。1951年4月のヒーローの凱旋パレードという社会イベントが、テレビ中継によって、どのように、それを現場で目撃した者のそれと異なるパースペクティブから再構成されたかを検討したこの研究は、テレビによる独自の現実の再構成を実証的に示した最初期の業績であり、マスコミ研究者エリフ・カッツらが後に「メディア・イベント」の概念 (Dayan and Katz, 1994) で展開した「テレビ・メディアによる擬似的な現実の造出」を、最も早期に予見的に実証したテレビ草創期の重要な研究である³⁾。

この研究は、カッツらが『メディア研究の基準テキスト』(Katz et al., 2003) で再検討した20世紀の「基準」的メディア研究13種の1つであり、カッツ本人が論じている (Katz and Dayan, 2003)。そこには、シブタニの関与について、「タモツ・シブタニの群集行動のゼミに参加していたシカゴ大の社会学の院生」だったラング夫妻は、という短い指摘だけがある (*Ibid.*, p.122)。指摘が短いには理由がある。当該研究をまとめたカート・ラングのPh.D.論文の序文にこうある⁴⁾。「私は、タモツ・シブタニ博士に最大の恩恵を受けている。1951年春学期のシカゴ大での彼のセミナー……で、このアイデアが芽生えた。研究を通じて彼は、この計画への励ましとアイデアと多くの物的支援を与えてくれた。……観察データの準備と分析は、ゼミの事業 a seminar project とするべきだったが、彼は、どんな公的な役割も取らないと主張した」(Lang, 1953, p.ii)。当人の希望で、当該研究はシブタニの指導とあまり関係づけられていない(初出の学術誌と以後の多くの論文集への再録でも、シブタニへの謝辞はあるが、上の詳細はない)。マスコミ研究の最重要例の1つがシブタニのゼミで生まれたことは関係者以外には認識されていない⁵⁾。彼が「慎ましい人」と呼ばれる1理由である。

シブタニは5冊の著書を書いたが、うち2冊が体系的な社会学の理論書である。1961年の『社会とパーソナリティ』(Shibutani, 1961)は「社会心理学への相互作用論者のアプローチ An Interactionist Approach to Social Psychology」の副題をもち、これは、リンドスミスとストラウスの『社会心理学』初版 (Lindesmith and Strauss, 1949) などと並んで(しかも明示的に「相互作用論者の」と謳ったおそらく最初の)最も初期のシカゴ社会学の立場の体系的な社会学理論である⁶⁾。これも、も

はや忘れられた事実だろう。

当該書の再刊「まえがき」で、社会学者のバリー・グラスナーが、同書を再読して「すでに社会学の潜在意識にあるが、通例シブタニと結びつけられていない」いくつかのアイデアに出会ったと記している (Glassner, 1987, p.viii)。シブタニを含む日系人の経験を扱った近年の研究で、イノウエは、「今日に至るまで、シブタニは、社会学者の社会学者 a sociologist's sociologist として、シカゴ大学に関連した学問的方法を進歩させた者として、もっともよく知られている」と要約している (Inoue, 2016, pp.23-24)。当人の記念論文集への寄稿ではあるが、パークレーでトムの学生だった社会学者トーマス・シェフは、「トムは、教育と研究について、その達成が値するだけの賞賛を得ていないと思う。……いまや主要な学部のほとんどの、トムがリクルートし、あるいは訓練した人が少なくとも 1 人はいる」とすら指摘した (Scheff, 1996, p.164)。シブタニの講義の様子はダニエルス (Daniels, 1996) に描写がある。しかしそのシェフもまた、「彼は、学生の自然な傾向を引き出す最高の教師だったと思う。彼はよい聞き手であり、自分自身の考えはめったに話そうとしなかった。もし彼の考えを見つけないなら、時として、長い時間、問いたださねばならなかった」と回想する (*Ibid.*)。筆者に対してトムは、もう少しだけオープンだったと思う。

多くの学問的達成を残しながら、あまりそれを語らない人。自分を表に出さない人。熱心な教育者であり、自分のアイデアと貢献を含む研究が、学生の名前で世に出ることを望む人。「慎ましい人」の達成を検討することは、その慎ましきゆえに困難である⁷⁾。

小論では、2つの論点に限定して、シブタニの研究傾向を要約的に検討する。すなわち (1) 日系二世アメリカ人としてのシブタニの経験、(2) それを反映した彼の基本的な発想である。トム・シブタニには、これまででも多くの概念と研究領域が帰せられてきた。準拋集団論、人種関係論、流言研究、士気低下の研究、シンボリック相互作用論などである。これらは表面的には事実だが、必ずしも彼の研究の全体的な傾向を反映しないとも思う。小論では、前出グラスナーも言及した「社会的世界 social world」の概念を、トムの主題的な鍵概念として検討したい。

2 人種関係の中で

シブタニの集中的なフィールド調査は、1941年12月7日、日本軍の真珠湾攻撃の直後から開始され、1946年9月まで続く。この期間に彼が出来事を記録し、参与観察を行った場所は、サンフランシスコ・ベイエリア、タンフォラン集合センター（カリフォルニア州）、トゥールレイク再定住センター（カリフォルニア州）、イリノイ州シカゴの再定住施設、キャンプ・ホイラー（ジョージア州）、フォート・ミード（メリーランド州）、フォート・スネーリング（ミネソタ州）、太平洋戦線への輸送途上、占領下の東京横浜地区である。前4か所は日系人の強制収容と移住に関連した場所（いわゆる「日系人収容所」だが各種の名前で呼ばれる。註9）も参照されたい）での日系アメリカ人への調査で、次の4か所がアメリカ軍の施設内でのアメリカ兵（日系米兵が中心）への調査、最後が占領下の日本人への調査である（Shibutani, 1948, p.iii）。

これらの現場で取られたフィールドノートは、直後に整理され、自己保存に加えて郵便などで毎日のように安全な場所の親戚や知人（ハーバート・ブルーマーを含む）に送付され、事後にまとまった記録となる。それを用いて彼の学位論文（1944; 1948）、流言研究（1966）、士気低下の研究（1978）などが準備された。これらのノートにおいてシブタニは、修士論文と博士論文のテーマだった流言の実例（1300例）を収集するとともに、大量の人種間緊張の実例をも記録した。彼の調査フィールドは当人の強制移住と従軍の経験につれて移動し、その先々の出来後が記録された。当初、彼は流言研究の目的でフィールド記録を開始したが、結果として人種問題の現場での記録をも準備することになった⁸⁾。

最初のフィールドノートは真珠湾攻撃直後のベイエリアでの日系人の間での流言を記録した。それを使った1942年春学期のターム・ペーパーがドロシー・トーマスに評価され、パークレーの4人の教授がフィールドワークの継続が何よりも重要だと彼を指導した。

日系人の強制移住が決定されると、ドロシー・トーマスがJERS (Japanese Evacuation and Resettlement Study) 調査計画を組織する。日系人の間の出来事は知られておらず、トム・シブタニとジェームズ・サコダのターム・ペーパーが、ドロシーの計画に一定の基礎を提供した。

トムのデータの一部は、彼の修士論文にも用いられた (Shibutani, 1944)。トムは UC バークレーの調査助手としてドロシーの調査計画に参加したが、そこでドロシーの調査方針と対立した⁹⁾。

2-1 収容所での参与観察

学部生時代のシブタニが、どの程度まで社会調査の実際の手法を習得していたかは不明である。彼の修士論文には、ドロシーのイェール時代の社会行動の観察研究への言及がある (Shibutani, 1944, p.24)。とはいえ 21 歳のシブタニのフィールドノートが、サコダのそれとともに、ドロシー (と W・I) を、大規模な調査計画へ向かわせた (Baldwin, *op. cit.*, p.8; Miyamoto, 1989, p.39)。両トーマスの学生として、一定の知識は学部でも持っていたと推定される。JERS での仕事で記録する習慣が身についたと彼は後に述懐する。

JERS の調査計画には現場からの批判も多くあり、フランク・ミヤモト (Miyamoto, *op. cit.*) やレーン・ヒラバヤシ (Hirabayashi, 1999) などに評価がある。ミヤモトはドロシーの当該計画への関与を、(1) 計画の動員者、(2) 研究の監督者、(3) 研究者の 3 つの役割から検討した。ドロシーの当初の学際的な調査計画は、予定された研究者が戦時動員で調査からの離脱を余儀なくされ、縮小された。計画の主要な動員者だった彼女は、当初の予定から大きく外れない実査を遂行する義務を負った。当初彼女は自分の役割をもっと狭く考えており、ミヤモトはこの点に、本計画の基本的な困難を見出す。ドロシーは多忙すぎた。ミヤモトは、ドロシーを新実証主義的な行動主義の研究者だとし、物理学者のように客観的に人間行動を扱おうとしたとみる。JERS での彼女は、以前の実験社会学ほどに数量化可能なデータを収集できなかったが、行動主義的な基準は維持した。各収容所での重要な状況ごとに、注意深い行動観察の必要を強調し、「観察者の制御」に関心があった。トゥールレイクはバークレーに近い収容所だった (*Ibid.*, pp.31-36)。そこは 1943 年以後、「忠誠登録」(後述) を拒否した「不忠」な日系人約 18000 人を収容するキャンプになる。

ドロシーは主に手紙で指示を出し、時々現地に来た。年 1 回のスタッフ全体会議があった。最初の年、ドロシーと W・I は、3～4 か月に 1 度、数日ずつトゥールレイクに滞在した。W・I も滞在したが、その時

はいつもドロシーと一緒にだった。ドロシーは主に手紙を使った監督で、特定の観察は指示せず、調査者が送った材料に応じてさらなる探究方向を指令した。フィールドワーカーには、収容所生活の特性を反映する出来事、避難者の反応、態度と行動を毎日記録することが求められた。収容所の政策と出来事に関するドキュメント収集も求められた。ただしミヤモトの記憶では、ドロシーは検討される話題の幅広い概要は配布しても、研究上の問題・調査設計・方法的な手続きは議論せず、調査助手たちの主な不満は、何を調べるように期待されているかが不確実だという感じにあった。理論的な方向性の欠如を気にし、明示的な指示の不足に苛立った者もいた (*Ibid.*, p.40)。

ヒラバヤシは、ドロシーが、1942年のフィールドワーカーへの指示で、「出来事が起きたその時にその場で記録された」社会史的な記録を毎日記すように言ったという。第2に彼女は、「コミュニティの構造に関する準備的な報告」へとデータを組織することも求めた。第3に、JERSでのデータ収集と分析を構造化するのに使われるカテゴリー自体が発達することにも留意しつつ、要約を毎週記すことも求めた。これら自体、JERS調査が徹底して経験的でも帰納的でもなく、フィールドワーカーが留意すべき一定の概念枠組みをすでに採用していたとする (*Hirabayashi, op. cit.*, p.63)。同じ1942年のメモでドロシーは、「みなさんが関与し、記録を取っている状況は、強制された大衆移住 *enforced mass migration* のものです」と述べており、当初から明瞭な概念上の区別があった。データ収集のため調査者にドロシーが示した3つのガイドする概念は、(1)「文化紛争」(日本人対アメリカ人の二分律で概念化されている)、(2)社会と個人の解体、(3)後続する再構成の過程、だった。「紛争、解体、再構成」という古典的な人種関係モデルは、パークのいう人種関係サイクル *race relations cycle* と類似するとヒラバヤシはいう (*Ibid.*)。JERSに助言していたシカゴの人類学者ロバート・レッドフィールドはパークの義理の息子だった。さらにこの発想はW・Iの移民研究の概念化とも共通しており、当初から両トーマスが、日系人の強制収容を移民研究の一種と把握していたと筆者も考える。

収容所生活の記録は多いが、調査に従事したフィールドワーカー自身の記録には、チャールズ・キクチの日記 (*Kikuchi, 1993*) とタミエ・ツチヤマのドロシーへの書簡集 (ヒラバヤシ (*Ibid.*) はこれを掲載) など

があり、両者にトム・シブタニの作業への言及がある¹⁰⁾。キクチ日記には、「トムは、毎日7ページのタイプしたレポートをトーマス博士に書いているという。どうしたらそれだけ書く事が見つけられるのだろう。彼は、疑念をもたれて、手紙が検閲されるのを恐れているが、少しドラマ的にしすぎかと思う」(1942年5月)とある(Kikuchi, p.68)。当初、シブタニが熱心に作業に参加したことが推測できる。

その後のドロシーと調査者の複雑化した関係がツチャヤマの手紙に描かれている。「あらゆることにまったく嫌気がさしました。ハワイに小さな農園を買って、戦争が終わるまで野菜を作っていたい。それから珊瑚礁に行きたい。もう二度と、決して人間を扱いたくない。……もしどうしてもキャンプに戻れとおっしゃるならそうしますが、わたしがひどくおかしくなったら、全体報告を完成する前に、あなたを見捨てる可能性もあります。(いまわたしは、もうあなたを助力できないと収容所で感じたトム・シブタニやチャーリー・キクチと同じように感じています)(自己検閲)[最後の1文は原文では消されていたが判読は可能だった：原註]」(1944年1月24日)(Hirabayashi, *op. cit.*, p.140)。この時点では、ツチャヤマとキクチはもちろん、トムとドロシーの調査上の関係もかなり破綻していたようだ。

トムがドロシーの調査に感じた問題は、現地で調査をガイドする理論枠組みの不在だった。イチオカの記録にはトムとドロシーの対立が明示されている(Ichioka, 1989, pp.9-12.)。トゥールレイクへの移動前にトムはこう書いている。「3週間をここで浪費して、私は確信しました。もし何かの計画があれば、我々はもっと効率的になり、重要なことを見逃さず、もっと組織されて重複がなくなるでしょう。心を空にして計画に入るのは、全員が何を探すが分かるように訓練されていればよいことですが、我々はそうではありません。ですから何かアウトラインを作らなければなりません」。シブタニはドロシーからの指示を期待したが、それは来なかった。

1943年2月、収容された日系人を隔離のない地域に再定住させる名目で「忠誠登録 loyalty registration」が実施された。その書式の問27と問28が重要な結果につながった。問27はアメリカ軍への従軍の意志を、問28はアメリカへの忠誠心を回答させるものだった。大多数は「はい-はい」または「いいえ-いいえ」と回答し、これにより再定住または

隔離されつづけた。ドロシーの統計分析は、これらの回答がどんな属性の日系人から得られたかを検討し、JERSの主要な知見になった(Miyamoto, *op. cit.*, p.44)。

同年、共同者のモートン・グロージンズがドロシーに、「T(タモツの意)はもっと指示が必要だと抗議している——すべてを収集はできないと言っている。そして全員が……あなたに、以前よりもっと精密に問題を定義してほしいと一致している」と伝えた(Ichioka, *op. cit.*, p.11)¹¹⁾。トムはパークレー初期から社会理論に関心があった。これに対してドロシーは、トムを妨害する人物とみなし、端的に伝えている。「あなたは本研究に……非常に不満だという証拠をみせている。未熟さゆえの、時間が克服する態度だと考えていた。しかし、わたしの要求をしたがらない傾向は、ほとんど変わっていないようだ。あなたの否定的な傾向は、わたしを大いに悩ませるだけでなく、共同作業者の士気にとっても明らかに破壊的です」(*Ibid.*)。

1943年10月にドロシーは、JERSの根本的な目標の覚書を書いた。「……本研究の目的は、(a)この集団に課せられた制約の性質と、(b)その制約下と解放後に、彼らがいかに行動したかについて、“関連する”データを収集、組織、分析することである」。やはり“関連する relevant”の1語で調査対象を示すのは抽象的だと筆者も思う。統計処理の専門家ドロシーにとって、社会学者は社会科学者のうち「おそらく最悪の違反者」であり、「非現実的で空想的な理論」を組み立てるだけだった。理論枠組みを求めるメンバーに、彼女は、「あなたの主な問題は、この計画の本質的な単純さを受け入れないことだ」と言った。また、自分はただ「特定状況下での、ある人々の生活様式の記録」を求めているだけだとも告げた。ドロシーはJERSに決して社会理論を含めなかった(この段落の「」内引用はIchioka, *op. cit.*, p.11-12)。

以前の実験社会学の試行を通して、ドロシーは、標準化された観察者、測定装置としての調査助手という発想に慣れていた。そこでの観察者は、少数の具体的な指示にしたがって、保育園の子供などの観察対象が行った外部行動を、すべて記録するよう指示された。これが「真空掃除機的」(Hirabayashi, *op. cit.*, p.62)なドロシーの調査の基本指向だった。何をみるかを事前に特定しないのは、状況内部の全てが行動に影響しうると考えたW・I由来の仔細な社会学的感受性ゆえだろう。だが、この

基本的な発想が、大規模で複雑かつ流動的な強制収容の現場に持ち込まれたとき、何を記録すべきかの理論的な指示の欠如が嘆かれるのは、調査者が熱心な理論家であればそれだけ無理のないことだった。こうしてトムはドロシーとの一定の対立を残したまま学部課程を修了し、両トーマスらの勧めを受けて調査の現場を離れ、大学院へ進んだ。親米的なシブタニの立場が、対立する日系人収容者との間で危険になったことも、彼がトゥールレイクを離れた要因だという¹²⁾。このような事態でもドロシーのJERS 調査結果がまとめられたのは驚くべき力技かもしれない。

2-2 日系二世の社会的世界

トム・シブタニは軍隊を嫌っていた。その彼がアメリカ陸軍に従軍したのは、ただ日系二世としてのアメリカへの忠誠心を表明する必要からだった。シカゴでの2年間の修士課程ののち、再び彼は人種関係の現場に巻き込まれる。この時期のフィールドノートから当時の体験を分析するが、怒りを鎮めるのには30年以上が必要だった。当該書『中隊Kの落伍者たち』(Shibutani, 1978)は、トムの従軍記録でもあり、日系人「442部隊」の実例などから理想視されがちな日系二世の従軍の、別の極端な実態を記録している。それは、人種偏見の中で軍に志願しながら墮落していく、戦闘地域には1度も入らなかったある日系部隊の日常を詳細に記録したクロニクルであり、軍隊での士気崩壊プロセスの記述的な分析である。この研究でシブタニは、自分が記録を取っていることを同僚の二世兵士に隠さず、むしろ折々に協力を仰ぎ、上官には隠れて調査を実施した(事後に関係者の許可を得て刊行)。ノートはほぼ毎日、郵便で外部の親族や友人に送られた。この勤勉な記録作業はトゥールレイクで得られた習慣だ、というドロシー・トーマスへの謝辞がある。

本書の第2章「二世の忠誠心への挑戦」に、本土とハワイにおける日系二世の社会的世界がリアルに記録されている(以下、当時の記録は同書から要約、「」内は引用)。抽象的には、それは3つの社会的世界の齟齬の記録である。一方には、成人した後に移民した日系一世の世界がある。そこでは日本語と日本の文化と価値がある程度維持され、日本の雑誌やサムライの規範を称揚する映画なども見られている。他方の極にはすでに適応したアメリカ白人の世界があり、個人主義・自由主義的なアメリカ的価値が称揚されている。これら2極の中間に日系二世の社会

的世界がある。彼らは親である日系一世の価値観に影響されて、「誇り高い、高邁な理想で特徴づけられる“民族”の一部だと意識していたが、日本的価値の理解は不完全かつステレオタイプのだった」。他方でアメリカ社会に生まれ育った彼らは、アメリカ白人と同等の未来を求めた。しかし二世が成人すると、「親たちがかつて直面した障壁の多くにやはり直面した」。人種偏見と差別である。このように「他のアメリカ人からは分離され、また親と効果的にコミュニケーションできるほど日本語をうまく話せず、……二世たちは自分たち自身の……社会的世界に住んで、その中で経歴を作ろうとした。……彼らの社会的世界はアメリカ社会の小規模の模造品だった」。それでも二世たちは、魅力、ロマンス、成功というアメリカの価値と、白人に匹敵する生活を熱望した (*Ibid.*, pp. 25-27)。

もともと移民の子世代の世界は平時でも混乱しやすい。家庭内で接触する親世代の言語や文化と、外の世界で獲得した移民先の言語や文化との相違による葛藤である (Cf. Shibutani and Kwan, 1965, p.354)。日米開戦により、二世の忠誠心の問題が公的な関心事になった。一世の忠誠心は日本とアメリカの間で動揺したが、二世にとって日本の生活はあまりに厳しく制約的だった。ほとんどの日系人は日本と結託しておらず、でたらめな糾弾と不信を恨み、「ジャップ」呼ばわりされるスティグマに憤慨した。「裏切りジャップ」叩きは過熱し、主流派アメリカ人にとっては「安全で利益も多い暇つぶし」になった。差別的な各種の張り紙が街中に出た。ある理髪店は「ジャップの方、ひげ剃り無料——カミソリが滑っても責任は負わず」と掲示して不評を買った (*Ibid.*, p.50)。身を切る偏見に包囲されて、多くの者が、忠誠心ある市民の義務を果たす機会を求めた。献血し、戦時債券を購入し、市民防衛組織に志願した。

こうした状況を背景に、多くの二世が「忠誠登録」に応じアメリカ軍に志願した。皮肉なのは、この状況下ですら、日系一世の価値観が日本の影響を残していたことである。同書にはハワイの実例がある。「しばしば一世は日本文化のやり方で貢献した。毎朝のお辞儀はアメリカ本土に向けられた。祖国のために息子を戦地に送るのが古式ゆかしい日本の伝統だった。ある母親は言った。「私はお国のために息子を捧げたのです。とても満足し、誇りに思っています」。別の母親は言った。「もちろん息子は軍隊にいるのですから、生きて帰って来ようなどと思っ

りません。腰抜けとして帰ってきてほしくありません」と」(Ibid., p.40)。実利的でアメリカ的な二世の志願動機を、一世の過度に封建的で文脈外れの忠誠心が間違って支持し、これらの齟齬には無関心なまま主流派アメリカ人の戦争行為が遂行されていった。3つの社会的世界のズレは大きく、皮肉で残酷である。このような人種関係をめぐる多くの事件が二世の社会的世界を襲った。それは軍隊でも同じだった。彼らの多くは、偏見に対処するためにアメリカ人としての自己を強く意識した。あるいは差別的な扱いと白人米兵への不満を噴出させ、処罰されて集団の士気を喪失した。混沌とした従軍中、二世兵士たちは「リコーラン映画」(Rikoran movie, 李香蘭・山口淑子出演の中国舞台の映画)を観て夢中になった(Shibutani, *op. cit.*, pp.289-294. トムはのち山口と面会し高く評価した)。彼女が「中国の二世」(日系二世中国人)だ、との風評がその一因だった。二世米兵のデリケートな価値観と感受性が窺える。李香蘭作品は国策映画として複雑な位置にあるが、二世兵士の社会的世界では重要な心の支えになった。「日本の拡張主義政策の微妙なプロパガンダはほとんど感知されず、多くの観客にとってそれは、占領軍で働く男性と恋に落ちた、きれいな地元女性のセンチメンタルな物語だった」。

軍隊生活を余儀なくされたトムにとって、これらの事件を日々の記録に残し続けることが、アメリカ人社会学者としての自己確認の営為であったかにもみえる。終戦直後の東京と横浜では、多くの日系人と同様、彼もまた日本人と日系二世の意識の相違に困惑した。

以後の研究生生活を通して、トム・シブタニは日系二世の自覚は維持しつつも「アメリカ人」の立場を堅持した。除隊後シカゴの大学院で博士論文を完成させ3年間講師を務めた後、UCバークレーに新設が決まった社会学部に1951年に異動する(歴史社会学者ラインハート・ベンディックスと同期で、同学部の最初の雇用)。翌年ブルーマーが学部長となってバークレーの社会学が本格的に始動するが、学内政治に嫌気がさしたトムは、昇進も希望したように得られず、1957年に辞職する。作家のキャリアを4年間試みたが成功せず、それまでに準備した考えを体系化して、教科書用に『社会とパーソナリティー』を1961年に出版し成功する。同時期、多くのオファーの中から「気候がよかったから」(筆者との会話、1991年、サンタバーバラ)との理由でUCサンタバーバラの招聘を受けて大学に戻り、以後は同地に定住した。その25年後、

車の助手席に筆者を乗せて運転しながら「日本人はよくやっているね」と話した時、彼の立場は明らかに（内面に葛藤はあれ）成功したアメリカ人のそれだった。青年期の厳しく危険な諸体験が、彼の「慎ましい」態度を形成したように見える。シブタニは多くの学的動向の静かな結節点だった。

戦時の人種偏見と強制収容、両親の“祖国”との戦争への従軍、占領者として訪れたその国での混乱。これらの詳細な記録と分析をへて、トムが強烈に意識せざるを得なかったのが、社会的世界 social world の多様性と機能という現実だったと筆者は考えている。この認識から彼は、戦後の諸研究において、W・Iとドロシーがかつて「状況の定義」概念を用いて行った分析を継承しつつ、この概念を精密化して利用していったと考える。

3 社会的世界の概念と社会学の方法

「社会的世界」という用語自体は、アメリカ社会学では、W・Iやその影響下にあるシカゴ系のモノグラフなどに類出する定型表現である。ただし1920年代頃のこの語は、基本的に「物理的世界 physical world」の対語に使われ、物理学では扱えない人間の世界という含意で出現する。これに対して、現代的な意味での「社会的世界」の概念は、しばしばシブタニの分析と結びつけて論じられている。

アンセルム・ストラウスは、「社会的世界というパースペクティヴ」の起源を、シブタニの1955年の準拠集団論 (Shibutani, 1955) に求めている (Strauss, 1978)。事実上の学術誌デビューである同論文は、関係者の中で非常に評価が高いが、すでに筆者の資質を発揮して、題目よりはるかに大局的な社会理論の骨子を提出した野心的な論文でもある¹³⁾。

3-1 準拠集団と社会的世界

コロンビア大学のハーバート・ハイマンが1942年に提出した「準拠集団 reference group」の概念は、当初、個人の脳裏で自他の地位の比較などに参照される集団という意味だった。シブタニによれば、その機能は、第1に、自分をそれに照らして評定する「比較」である（比較機能。この場合、準拠集団はどんな集団でもありうる）。第2に、個人が

そこへの所属を獲得し維持したい集団が準拠集団であり、そこからの要求は至上命令になる（規範機能。この場合の準拠集団は人が参加を望む集団となり、第1の場合と一致しない）。シブタニが提起する準拠集団の第3の意味は、「そのパースペクティブが個人の準拠枠を構成する集団」である。それは客観的に存在する人の集まりではなく、むしろ心理的な現象であり、行為者の経験の組織のされ方、知覚の場の構造化のことである。この意味での準拠集団は、実在または想像上の、嫉視・蔑視される、行為者がそのパースペクティブを取るあらゆる集合体である。準拠集団はこの意味で理解されるべきだと彼は主張した。以上の議論の要点は、準拠集団の定義には矛盾があり、第1と第2の機能で言及対象が異なる。これを回避するため、第3の広範な定義に限定すべきということである。「何人かの熱心な主導者にもかかわらず、準拠集団論には実際には新しいものは何もない」（*Ibid.*, p.563）と彼はいう。

ここから以後、彼は、シカゴ社会学の既存の用語を用いて、準拠集団を社会的世界の議論から説明する。まずトーマスの議論を展開させ、「人が一連の状況を整合的に定義できるのは、その人の組織されたパースペクティブによる」とする。パースペクティブは「その人の世界の秩序化された見通し」であり、「対象、出来事、人間性の各種の属性について所与とされたものごと」、「それを通して人が環境を知覚するマトリックス」である。レッドフィールドが言うように、文化とは集団参加者に共有されたパースペクティブであり、「社会を特徴づける行為および生産物として現れる慣習的な理解」である。ミードのいう「一般化された他者の役割の取得」とは、他者と共有されたパースペクティブという意味である。組織されたパースペクティブの存在で人間行動の一貫性が説明される。特定集団の見通しを内在化させれば、それが世界に対するその人のオリエンテーションとなる。以上であるなら、準拠集団の概念は、大衆社会の特徴から必要とされた多少の洗練を、長く親しまれた理論（シカゴ社会学）に導入するものでしかない。

デュエイが強調したように、社会はコミュニケーションを通してその中に存在する。共通のコミュニケーション・チャンネルへの参加によって、共通のパースペクティブすなわち共通の文化が出現する。現代大衆社会を特徴づける不一致と矛盾は、コミュニケーション・チャンネルの大量化と、それらへの参加の容易化に起因する。それはもはや領土の境

界と重複しないので、地理的な根拠は失われた。隣人はまったくのよそ者かもしれない。現代大衆社会は混乱するほど多数の社会的世界から構成されるが、その各々が組織された見通しをもち、各コミュニケーション・チャンネルが別個の世界を発生させている。チャンネルの安定性と広がりとは多様であり、社会的世界は構成・規模・参加者の地理的分散に関して異なる。大衆社会での生活の特徴のひとつが、多数の社会的世界への同時参加である。人は無関係な一連の活動に連続的に参加し、細分化された生活を送る。参加する社会の組み合わせも個々人で異なる。ジンメルが、個々人は、社会的な交際が交差する固有の組み合わせの上に立っている、と言ったのは、このことである。ある個人を理解するためには、その固有のパースペクティブを取らねばならないが、大衆社会では、ある行為に参加する時にその人がどの社会的世界に参加しているのかも知る必要がある。

個々人が大量のパースペクティブを内在化させた大衆社会では、不一致と紛争は必至である。だが多くの人の準拠集団は相互に支持しあってもいる。危険な任務に志願する兵士は家族に不安を喚起するが、彼らの価値には対抗しない。家族も、上官も、勇気を尊敬し臆病は軽蔑するからだ。大多数の人はコンパートメント化された人生を送り、交渉の連続の中で、ある社会的世界から別のそれへと移っていく。個々の世界で彼らの役割は異なり、他者との関係も異なり、パーソナリティーの別の面をあらわにする。人は人生のこの様式に非常に馴染んでしまい、なんとかほどほどに一貫した人間だと自認できるが、自分の行為が整合的なパターンに適合しないことは概して自覚していない (*Ibid.*)。

以上の議論はもはや準拠集団の操作的定義ではなく、それを概念の1つとする広範な社会理論の素描であって、8頁の雑誌論文に期待されるものではない。この論文が社会的世界の先駆的分析として評価されるのも、準拠集団論として批判されたのも、こうした統合的な見地からの大局的な論法による。前出グラスナーは、この「社会的世界」の考えを最大限に活用したのがハワード・ベッカーの『アート・ワールド』だとする。シブタニはこれ以後、数編しか学術雑誌に論文を発表しなかった。理由は、書物なら「全部語ることができる」というものだった (Baldwin, 1996, p.4)。注目や論争からやや離れた位置で、入念に包括的な仮説の体系を作り上げる。それが「慎ましい人」の主張の方法だった。

以上示した論調は、後続する『社会とパーソナリティー』などでも援用される典型的なシカゴ社会学の論法である¹⁴⁾。上掲論文では、個人の認知を組織立てるパースペクティヴ（人格統合の契機）と、個人行動を多様化させる大量のコミュニケーション・チャンネルと結果する大量の社会的世界（社会多様化の契機）という2つの契機が組み合わされて、ダイナミックな社会的世界の議論が素描されている。それはまた、概念装置を追加した「状況の定義」過程の検討でもある。戦時下の移民二世として、あまりにも多様な社会的世界の間で翻弄されつつ自己を確立した彼の青年期を考えれば、こうした社会的世界論が提出されたことはむしろ必然であろう。ここに彼の社会理論の基本的な視座があると思う。

3-2 『社会過程』における方法

シブタニはシカゴ社会学の発展的な継承者であり、またG・H・ミードの思想の社会学での展開者ハーバート・ブルーマーの学生で、よい友人を自認してもいた。しかし両者は方法的には別の方向を主導した。この点で重要なブルーマーの主張が「定義的概念 definitive concept」と「感受概念 sensitizing concept」の区別である。彼にとって、対象を明確に特定化する定義的な概念は、なお社会科学では正しく扱いきれるものではなく、研究すべき対象をそれと気づかせるように広く指示する「感受的」な概念の使用の方が現実的だった (Blumer, 1969, pp.147-152)。社会的世界の多様性は、一定の対象を定義的に示す概念では容易に把握しきれないからである。この方向は、多くのいわゆるシンボリック相互作用論の研究とも共通している。

これに対して、デューイやミードの科学主義に影響を受けたシブタニは、ドロシーの調査に従事した経験からも、より明示的に科学主義的な方向を指向した。とはいえそれは、W・Iの方法論に影響された「調査指向の検証可能な命題体系の構築」の方向で展開されている。このことは、彼の『社会とパーソナリティー』『社会過程』の両者において、各章の周到な構成と配置および各章末の明瞭な「要約」に端的に示される。『社会とパーソナリティー』（全638頁）は、「社会統制」「動機」「対人関係」「社会化」の4部18章からなるマイクロ・メゾ（中規模）レベル中心にマクロ・レベルまで検討した社会心理学の体系であり、『社会過程』（全595頁）は、「コミュニケーション過程」「維持過程」「変動過程」

「敵対過程」の4部18章からなるメゾ・マクロ・レベルを中心に検討した社会学の体系である。これらの著作は、多様な社会と個人を一定程度統合的に説明する経験的な概念の検討と、それらの関係の説明から構成される。シブタニの科学主義はドロシー・トーマスのような計量的な方向ではない。むしろW・Iの社会認識と方法認識を継承し、ドロシーの方法的な苦闘を目撃した上で両者を発展的に展開させたものであり、具体的には、社会の諸側面に関する既存の知見と考察を積み上げる中から、新たに概念を導入・洗練させ（前述の「社会的世界」はその一例）検証可能な命題へ構成する作業、いわばW・Iとドロシーの中間的な方向を前進させる作業だった。『社会過程』にはパークの枠組みを利用したと明記されている。彼の著作は全てがこの「過去の研究を整理し、その問題に関する命題を提出する」形式である。最も記述的な『中隊K』ですら、最後の章は士気低下の社会理論である。彼がシカゴ社会学を前進させたと評価されるのはこの点だろう¹⁵⁾。

筆者は『社会過程』が刊行された夏にトムと初対面したが、その時に授業用だといって本人から渡された配布物を、現在でも検討している。それは「タモツ・シブタニ著『社会過程 社会学入門』の命題目録」と題する24頁のコピー（Shibutani, no date）であり、当該書を構成する18章ごとに、主要な概念の定義（99個）と各章で導かれた仮説（203個）を列挙した一覧だった。『社会とパーソナリティー』について同様の命題目録は渡されなかったが、出版当時に作られていても驚かない。シブタニにとっての理論書とは、このように概念の定義と関連する検証可能な仮説が体系的に定式化されたものであり、それらを利用可能な経験的手法で日常的に検証することが具体的な社会学の手続きだった。W・Iの手法を形式的に洗練させたものだろう。命題化の程度に違いはあれ、理論書2冊以外でもこの方針は一貫している。彼の1968年のミード論（Shibutani, 1968）は、ミードの「I」（主我）概念を、生体と環境の適応の乱れを感知するセンサーのように理解するサイバネティクス的なミード自我論の整理である。この意味で、彼はシカゴ・プラグマティズム社会学の形式的な側面の継承者だろう。シブタニは1984年にアメリカ科学振興協会（AAAS, American Association for the Advancement of Science, 雑誌*Science*の刊行団体）のフェローをつとめたことを誇りにしていた。ハード・サイエンスの基準でメンバーを選ぶ

この団体に、社会学者が選ばれることはあまりないからだった。

戦前のヨーロッパ社会学の重視と戦後の機能主義社会学の重視の中で、古典的なアメリカ社会学の体系的な紹介と検討は意外に多くなく、多くの現代性ある研究が詳細に検討されていない。小論3作では、W・I・トーマス、ドロシー・S・トーマス、タモツ・シブタニという影響関係を追って、一定の研究系譜の見取り図を構成する努力をした。本論では、シブタニの経歴と関連させて、その理論的傾向の一端を要約的に紹介検討した¹⁶⁾。

註

- 1) 澁谷庄三郎は、内外綿株式会社（明治20年設立）の創設者のひとりで、明治5年3月には大阪堂島でシブタニ・ビールを醸造した実業家だった。シブタニの全般的な経歴については、ジョン・D・ボールドウィンによる論文（Baldwin, 1990）と、その拡張版（Baldwin, 1996）に詳しい。これらはシブタニ本人へのインタビューに基づいて執筆され、ある程度信頼できると考えられる。また近年ではイノウエ（Inoue, 2016）など、日系人研究の文脈でシブタニの経歴が扱われており、随時参照する。小論の記述中、澁谷庄三郎および榎之助に関する記述は、トム・シブタニ本人から筆者に指示された以下の著作をも参照した。元木光之編『内外綿株式會社五十年史』、内外綿株式會社、1937（昭和12年）および濱田徳太郎編『大日本麥酒株式會社三十年史』、大日本麥酒株式會社、1936（昭和11年）。「榎之助」については後書に記載があり（p.106）、これをNaonosukeと読むのか筆者には不明だが、トム本人の指摘に従った。「日本人の手になる最初のビール」として澁谷庄三郎の醸造所に言及した佐藤建次『日本ビア・ラベル盛衰史』、東京書房、1973、pp.39-42も参照した。以上に加え、1985年以来、トム本人と筆者との会話と文通から得られた情報もある（新島襄から父親への影響など）。なお、筆者の聞き取りミスに加え、当人が滞日時の短期間しか日本語を使わず、1940年代以後は訪日もしなかった日系二世アメリカ人であることによる当人の単純な勘違いもありうる。気付いた限りで注記する。
- 2) ボールドウィンによる評伝の原文は、“At Berkeley, Tom met Dorothy and W. I. Thomas and took courses from them. In 1941, Tom was enrolled in an independent studies course on demography with Dorothy when the Japanese bombed Pearl Harbor.”である（Baldwin, 1996, p.8）。トムがドロシーの授業を履修したことは確実であり、「彼らの授業を取った」という表現からは、W・Iがある程度UCパークレーの教育に関与したことが推測される。とはいえW・Iは1941年に78歳であり、引退後の立場ではな

いかと考える。

- 3) この研究は、清水幾太郎の主導で翻訳されたウィルバー・シュラム編の論文集 (Schramm (Ed.), 1968) に収録され (藤竹暁訳「テレビ独自の現実再現とその効果・予備的研究」、日本でも広く読まれた。カート・ラングの学位論文には、脳裏にある現実の「地図」と、実際の「現地」との相違を指摘して、脳裏の「擬似環境」(ステレオタイプ) の存在を論じたウォルター・リップマンの古典 (Lippmann, 1922) への言及がある。メディアが作る「擬似イベント」を論じ、日本でも広く読まれたプーアスティンの『幻影の時代』(Boorstin, 1962) には、リップマンおよびラング夫妻の先行研究への言及がある。
- 4) シブタニのゼミにおいてラングとラングが行ったこの研究は、カート・ラングの学位論文として提出される (1953年8月) 以前に、要約版が1952年に「PRの父」エドワード・L・バーネイズ基金の受賞論文に選出されたのち、両ラング名義でアメリカ社会学会の『アメリカン・ソシオロジカル・レビュー』18巻1号 (1953年2月号) に掲載された。なお、当初は群集行動の調査を意図した当該研究が、メディアによる現実再構成の研究へと展開した (2つの現実の比較になった) のが、具体的にいつ誰の貢献によるのかはなお判然としない。当該学位論文の審査委員にはアンセルム・ストラウスの名前もある。
- 5) この事実が重要なのは、「マスコミ研究」の一般的なイメージが、コロンビア大学におけるポール・ラザースフェルトらの機能主義社会学的な調査方法 (質問紙調査の多用) で代表されるからである (後藤, 1993)。シカゴ学派では、社会関係やコミュニケーション過程のあくまで一部としてマスコミの作用が位置付けられ、「そのものとしてのマスコミ研究」が行われたイメージがあまりない。20世紀初頭に、パークらによる新聞の研究がみられるが、新聞の社会的機能論の印象が強い。ラング夫妻の研究は、明らかにテレビ・メディアの「メディア特性」による現実の再構成を扱ったものであり、明瞭に「メディア効果」研究の可能性を示す。ジョージ・ガーブナーらのテレビ・メディア研究も、テレビ・メディアの特別な性格と現実の再構成過程を問題視した点で、この研究系譜に近い。筆者はこれらの研究を、個人の認知過程へ及ぼす効果を重視した点から、「認知的論的マスコミ研究」と総称している (その一部は後藤, 1986で報告)。
- 6) これが「シンボリック相互作用論者の symbolic interactionist's」でないことは要注意である。この2語からなる名称は、ハーバート・ブルーマーが1937年の論文の中で使った言葉 symbolic interaction に由来し (Blumer, 1937)、同人の『シンボリック相互作用論』(Blumer, 1969) で一般化し、シンボリック相互作用学会の創立 (1977) により学派として定着する。ただし、シブタニの『社会とパーソナリティ』は、プラグマティズムと精

神分析学（フロイトおよび新フロイト派のカレン・ホーナイとハリー・S・サリヴァンを含む）に依拠し（Shibutani, 1961, p.xii）、「シンボリック相互作用論」としての立場表明ではない（シブタニとブルーマーの理論的相違は後述）。アーノルド・ローズ編の翌年の論文集にも、An Interactionist Approach と副題がある（Rose, (Ed.), 1962）。シカゴ社会学は調査指向が強いため「そのものとしての理論書」が少なかった。

- 7) そもそもシブタニの最初に刊行された学術業績が「匿名 anonymous」名義だった（Shibutani, 1946）。アメリカ歩兵の心理を（おそらく自己の体験を含めて）検討した短い分析であり、学術誌の「軍隊社会の人間行動」特集の一部ゆえの「匿名」名義かもしれないが、象徴的な事実にもみえる。この傾向は W・I とも類似するように思う。
- 8) この部分について筆者は、かつて本学で実施されていた「戦後史研究会」にて報告したことがある（1994年9月25日、「戦後史研究会」報告）。
- 9) 実は JERS の名称自体が問題含みである（強制収容されたのは日本人ではなく多くが市民権を持つアメリカ人である）。この調査計画は、Japanese American Evacuation and Resettlement Study とも別称される。同様に、「強制収容」「再定住センター」「収容所」などの語も、論者によって原語・訳語ともきわめて多様に使用されており、小論でもあえて統一しなかった（事実上強制的な居住地からの移動と再定住施設内での隔離生活などを意味するが、用語は多様）。日系人の強制収容は戦後の社会問題であり、小論で扱いきれるものではない。あくまでシブタニの経歴の見地からのみ検討する。ドロシー・トーマスの著書に名前が出されたジェームズ・サコダと比較しても、トム・シブタニの貢献は、結果的にそれほど大きく扱われていない。
- 10) チャールズ・キクチ Charles Kikuchi は当時 UC バークレーの社会福祉学の大学院生で、1941年から1942年の日記が刊行されている。タミエ・ツチヤマ Tamie Tsuchiyama はやはりバークレーの人類学の大学院生で、1942年から JERS メンバーとしてボストンの収容所で調査に従事した。
- 11) グロージンの JERS での仕事は、後年まとめられている（Grodzins, 1949）。なお、ジェームズ・サコダ James Sakoda の仕事は、JERS の『損傷』『救出』に続く第3著『残余 *The Residue*』となる計画だったが刊行されなかった。ミヤモトのシカゴでの学位論文など、関係者は多くの JERS 調査関連の研究を残しており、当時収集されたデータはバークレーに残されている。トムは筆者に何度か、「ドロシー・トーマスの仕事は大変だった」「あのデータも誰かが（再度）整理しなければいけないんだが」と呟いた。これも伝えておきたい。
- 12) そもそも JERS 調査計画が、質問紙よりもインサイダーによる秘密裏のフィールド調査に依拠したのは、収容された日系人からの、調査への反発

が強かったためである。

- 13) そしてこの1955年論文を、ロバート・マートンがラルフ・ターナーの同時期の論文 (Turner, 1956) と比較し、ターナーを借りてシブタニを批判した (マートン『社会理論と社会構造』邦訳 257-259頁)。クラークは、シブタニがマートンら「機能主義者との……激しい論争の中で、こういう〔それ以前のシカゴ学派の〕コミュニティー研究を、社会的世界の研究へと変容させ、明示的な社会的世界の理論の展開を開始させた」と要約している (Clarke, 1991, p.130)。
- 14) 「W・I・トーマスは公式には引退していたが、彼がトゥールレイクにいるとき、トムに社会心理学の個人指導をした。このことでトムは、成熟した学者の広範な社会学的視点を知ることができた。W・Iの最後の学生になる機会が得られたことを、トムは特別な名誉に感じている」(Baldwin, 1996, p.8)。1942年、トムは22歳であり、W・Iは79歳である。筆者(後藤)は、1986年、UCサンタバーバラの教授だったシブタニと初めて面会し、準備期間をへて1995年に同校大学院へ留学し学位を得た。この期間を通して筆者は、公式には引退していたシブタニと頻繁に面会・文通し、個人指導を受けた。初対面の年、筆者は29歳、シブタニは66歳だった。

高齢になった師匠の半ば引退後に指導を受ける特殊事情が連続した結果とはいえ、アメリカ社会学の一定範囲が、3世代の「最後の学生」的關係に収まる事実には、筆者は不可思議な印象を持つ。いずれにせよ、シブタニの仕事は「W・I・トーマスの最後の学生」に恥じないものだろうが、筆者と彼らとの関係は、単なる偶然のわずかな接触にすぎない。ただし言うまでもなく、筆者もまた、トム・シブタニの(おそらく)最後の学生になる機会が得られたことを、特別な名誉に感じている。
- 15) シブタニは、先行するシカゴ系の発想を巧妙に組み合わせている。たとえば彼の流言理論 (1966) は、パークにおける「知識の形式としてのニュース」論と、W・Iにおける「状況を定義し個人を統制するゴシップ(うわさ)」という議論の融合だろう。彼のPh.D.論文 (1948) に、すでに同様の定式化がみられる。当該書に対しては清水幾太郎『流言蜚語』(1947)からの影響が国内で示唆されたことがあった。時系列的に不可能ではないが、むしろ両名ともプラグマティズム社会学に影響されていたと想定する方が妥当にみえる。当時シカゴに帰っていた彼が、日本で刊行されたばかりの清水の著書を参照できたかは疑問である。ただし1947~48年には彼はまだ一定程度の日本語を理解できただろう。シブタニの学位論文は、戦後シカゴの大学院の「伝説」だったとラング夫妻は記している (Lang and Lang, 1961, p.viii)。
- 16) トム・シブタニは、いつも古いタイプライターで打った手紙を送ってきた。署名はしばしばT.S.と略され、「T」の横棒はいつでもひどく傾斜していた。

最晩年の1通の署名の「T.S.」は、2文字の間が非常に狭く、略した「保」という漢字にみえた。筆者の思い込みか、偶然だったかもしれない。だがこれは、アメリカ人としての自己を強く自覚し、片言の数単語以外に決して日本語を使わなかった（戦時中だけで忘れたと言った）トム・シブタニを知る筆者には、とても玄妙な印象を与える署名だった（彼の日本名がその漢字であることを、筆者は国内のご親族との文通で知っていた）。危険なフィールドで複雑な印象管理を続けた体験を考えれば、計算された自己表出だった可能性もある。

2004年に彼が逝去したおり、UC サンタバーバラで行われたセレモニーに筆者は病気で出席できず、簡単な弔辞だけを送付した。その内容を説得的に展開したものが、今回『成城文藝』に掲載をお願いした小論3作になった。これらの小論を、学恩への感謝を込めて、筆者の「重要な他者」の一人である澁谷 保先生に捧げる。

* 本学部 1995 年度の海外長期研修を得て、筆者は UC サンタバーバラで学位研究を完成させることができた。同時に、毎日のようにトム・シブタニおよび社会学部の人々と対話することもでき、同地の日系人コミュニティを多少ながら知ることもできた。帰国直後から発病し報告が遅れたが、学位研究に加えて、今回小論3作にまとめた研究の基本になった背景の事実関係を知ることもできた。記して深謝するとともに、小論3作の掲載にあたり多大なご迷惑をおかけした『成城文藝』編集委員会と関係者の先生方に感謝します。

* 査読後の小論をご検討いただき、掲載にご賛同いただいたシブタニ教授の国内ご親族に感謝します。

参考文献

- Baldwin, J. D., "Advancing the Chicago School of Sociology: The Life and Work of Tamotsu Shibutani," *Sociological Inquiry*, 1990, Vol. 60: 115-126.
- Baldwin, J. D., "The Life and Work of Tamotsu Shibutani: Advancing the Chicago School of Pragmatic Sociology," in Kwan (Ed.), 1996, pp.3-22.
- Blumer, H., "Social Psychology," in Schmidt, E. P. (Ed.), *Man and Society*, Prentice-Hall, 1937, pp.144-198.
- Blumer, H., *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall, 1969.
- Boorstin, D. J., *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*, Harper, 1961.
- Clarke, A. E., "Social Worlds/Arenas Theory as Organizational Theory," in Maines, D. R. (Ed.), *Social Organization and Social Process: Essays in Honor of Anselm Strauss*, Aldine, 1991, pp.119-158.
- Daniels, A. K., "When We Were All Boys Together ... Graduate Schools in the

- 50s and Beyond,” in Kwan (Ed.), 1996, pp.23–44.
- Dayan, D. and Katz, E., *Media Events*, Harvard Univ. Press, 1994.
- Glassner, B., “Preface to the Transaction Edition,” in Shibutani, 1987, pp.vii–ix.
- 後藤将之、「認知的論的マスコミ研究の検討」、『東京大学新聞研究所紀要』34号、東京大学新聞研究所、1986、pp.211–249.
- 後藤将之、「初期マス・コミュニケーション研究の一側面——ラザースフェルト以前の研究例」、『コミュニケーション紀要』第7輯、成城大学大学院文学研究科、1993、pp.27–42.
- Grodzins, M., *Americans Betrayed: Politics and Japanese Evacuation*, Univ. Chicago Press, 1949.
- Hirabayashi, L. R., *The Politics of Fieldwork: Research in an American Concentration Camp*, Univ. Arizona Press, 1999.
- Ichioka, Y. (Ed.), *Views from Within: The Japanese American Evacuation and Resettlement Study*, Asian American Studies Center, UCLA, 1989.
- Ichioka, Y., “JERS Revisited: Introduction,” in Ichioka (Ed.), 1989, pp.3–27.
- Inoue, K. M., *The Long Afterlife of Nikkei Wartime Incarceration*, Stanford Univ. Press, 2016.
- Katz, E. and Dayan, D., “The Audience Is a Crowd, the Crowd Is a Public: Latter-Day Thoughts on Lang and Lang’s ‘MacArthur Day in Chicago,’” in Katz E. et. al. (Eds.), 2003, pp.121–136.
- Katz, E., Peters, J. D., Liebes, T., and Orloff, A. (Eds.), *Canonic Texts in Media Research: Are There Any? Should There Be? How About These?*, Polity Press, 2003.
- Kikuchi, C., (Ed. by Modell, J.), *The Kikuchi Diary: Chronicle from an American Concentration Camp, The Tanforan Journals of Charles Kikuchi*, Univ. Illinois Press, 1973 (Reprint, 1993).
- Kwan, K. M. (Ed.), *Individuality and Social Control: Essays in Honor of Tamotsu Shibutani*, JAI Press, 1996.
- Lang, K., *MacArthur Day in Chicago: A Study of Observational and Political Perspectives*, Ph.D. Dissertation submitted to the Faculty of the Division of the Social Sciences, The University of Chicago, 1953.
- Lang, K. and Lang, G. E., “The Unique Perspective of Television and Its Effect: A Pilot Study,” *American Sociological Review*, 1953, Vol. 18: 3–12.
- Lang, K. and Lang, G. E., *Collective Dynamics*, Thomas Y. Crowell, 1961.
- Lindesmith, A. R. and Strauss, A., *Social Psychology*, Dryden Press, 1949.
- Lippmann, W., *Public Opinion*, Macmillan, 1922.
- Miyamoto, S. F., “Dorothy Swaine Thomas as Director of JERS: Some Personal Observations,” in Ichioka (Ed.), 1989, pp.31–63.

- Rose, A. M. (Ed.), *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Routledge & Kegan Paul, 1962.
- Scheff, T. J., "Self-Esteem and Shame: Unlocking the Puzzle," in Kwan (Ed.), 1996, pp.143-166.
- Schramm, W. (Ed.), *Mass Communications, Second Edition*, Univ. Illinois Press, 1968. (学習院大学社会学研究室訳『新版マス・コミュニケーションマス・メディアの総合的研究』、東京創元社、1968年.)
- Shibutani, T., *Rumors in a Crisis Situation*, MA Thesis submitted to the Faculty of the Division of The Social Sciences, The University of Chicago, 1944.
- Shibutani, T., *The Circulation of Rumors as a Form of Collective Behavior*, Ph.D. Dissertation submitted to the Faculty of the Division of The Social Sciences, The University of Chicago, 1948. (Submitted in Dec. 1948, sometimes cited as a 1949 paper.)
- Shibutani, T., "The Making of the Infantryman," *American Journal of Sociology (Human Behavior in Military Society Issue)*, 1946, Vol. 51: 376-379. (Originally published as an article by "ANONYMOUS" .)
- Shibutani, T., "Reference Groups as Perspectives," *American Journal of Sociology*, 1955, Vol. 60: 562-569.
- Shibutani, T., *Society and Personality: An Interactionist Approach to Social Psychology*, Prentice-Hall, 1961 (Transaction Edition, 1987).
- Shibutani, T. and Kwan, K. M., with contribution by Billigmeier, R. H., *Ethnic Stratification: A Comparative Approach*, Macmillan, 1965.
- Shibutani, T., *Improvised News: A Sociological Study of Rumor*, Bobbs-Merrill, 1966.
- Shibutani, T., "A Cybernetic Approach to Motivation," in Buckley W. (Ed.), *Modern Systems Research for the Behavioral Sciences*, Aldine, 1968, pp.330-336.
- Shibutani, T., *The Derelicts of Company K: A Sociological Study of Demoralization*, Univ. California Press, 1978.
- Shibutani, T., *Social Processes: An Introduction to Sociology*, Univ. California Press, 1986.
- Shibutani, T., *Propositional Inventory for Social Processes: An Introduction to Sociology*, (educational handout), UC Santa Barbara, no date (ca. 1986).
- Strauss, A., "A Social World Perspective," *Studies in Symbolic Interaction*, Vol.1, 1978, pp.119-138.
- Turner, R. H., "Role-Taking, Role Standpoint, and Reference-Group Behavior," *American Journal of Sociology*, 1956, Vol.61: 316-328.